

ローマ人への手紙2章5節 「神の正しい裁き」

1A 悔い改めない心

1B 神の慈愛の軽視

2B 頑なな心

2A 御怒りの日

1B 正しい裁き

2B 蓄積

本文

ローマ人への手紙 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ロマ書 1 章まで来ました。今日は、ローマ 2 章 5 節に注目したいと思います。(2 章全体は、来週に学びます。)**「あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」**

パウロは、ローマ人に手紙を書くにあたって、神の福音、良き知らせを伝えたいと言っていました。そして、福音に神の義、正しさが現れていて、その義は信仰によって始まるということをお話しました。イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる義、正しさです。ところが、人々はそのことを拒みます。その理屈や言い訳がいろいろあります。それぞれの言い訳は、自分は救われる必要はないと感じていることです。そこで、すべての人が罪を犯して、救いが必要なのだということを論じ始めるのです。

まず、「そんなこと、教えてもらわなかった。」という反応です。神について、私は知らなかった。どうして知らなかったことに、責任が問われるのか？というものです。パウロは 1 章の後半で、「あなたは、はっきりと知っています。被造物に現れていますから。」そして、不義の根本である、「神を神としてあがめない」ということを取り組みました。神を神としてあがめないために、感謝がなく、心と思いが虚しくなり、その鈍い心が暗くなったと言っていました。そして、性的な乱れを始めとする、あらゆる悪を貪るようになったと論じています。そしてそれらのことを行ったら、教えられるまでもなく、裁かれるという神の定めを心の中で知っていながら、行っているし、まだ同意していると言っています。人々が、普段はきれいにして上塗りしているところを、その闇の部分をお話しました。

そして、2 章は、こういったことを自分自身のこととして見ない姿に対して、パウロは語り始めます。自分はそれほど悪いことはしていない。良い人間か、悪い人間か、としたら、良い人間だろう、と人は大抵、みなしています。人間的には、正しい生活、一定の道德の規準に沿った生活をしていると思っているのです。実は、福音にとって、この「他人の目には、正しそうな生活をしていて、

自分自身も正しいと思っている。」ということが、いかに神の前で義とされるのに妨げになっているか知れないのです。

1A 悔い改めない心

1B 神の慈愛の軽視

パウロは始めに、「あなたは、頑なで悔い改める心がないために」と言っています。何をもって頑ななのか？それは、その手前の4節を見ますと分かります。「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」神は罪を犯す者たちに対して、忍耐深くあられます。早まって裁かれることはなさいません。そして、いつくしみ深い方で、そのことによって人々が悔い改めに導かれます。

私たちはとかく、悔い改めは、厳しく対処することによって与えられると思ってしまう。こんな悪いことを行っているのは、対処が甘すぎたからだ。しっかり反省させるために、懲らしめないといけないと考えます。果たしてその通りでしょうか？牧者チャック・スミスに、ある姉妹が涙をもって悩みを打ち上げました。旦那さんが家から出て行って、他の女のところに行ったとのこと。それで、他の牧師がそこに行って、自分のしていることを悟らせるために、神の裁き、神の怒りについて語ったようですが、逆効果でした。彼はますます態度を硬直させ、怒って、追い出したそうです。それで、チャックが行くことになりました。中に入っていくと、彼には、どう見ても、奥さんより見栄えのしない女性だったようです。それはともあれ、彼は中に入って、自分でも分からないのですが、ただ泣いてしまったそうです。何も言わずに泣いてしまったそうです。そして結局、何も言えず、その家を出て行ったそうです。「何のために行ったのか？」と彼はちょっと後悔しました。そうしたら、なんとその男性は、姦淫の罪を犯している相手から離れて、奥さんのところに戻ってきたそうです。

人が悔い改めるのは、神の慈しみ深さを知ったからです。心から変えられるのは、神のご慈愛に触れるからです。イエス様が、涙を流して、ご自分の足のところにひれ伏していた不道德な女に対して、「ルカ 7:47 この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。」と言われました。多くを愛する人は、多く愛されてからなのです。

ところが、そのような慈しみ深さに対しても、それでも悔い改めようとしない心があるとパウロは指摘しています。それが、「自分を正しいとする」心なのです。イエス様が、人には正しいとされていたパリサイ人や律法学者には非常に厳しいことを語られ、そして、取税人など、罪人とされていた人々とは、一緒に食事をしたり、姦淫の現場で捕らえられた女にも、「わたしも罪に定めない」と言われて、優しくされました。それは、どうしてか？と言いますと、「自分を正しいとする」自己義認の心が、人々に頑なさをもたらしているからです。

イエス様は喩えを、これら宗教指導者に語られました。ある人に息子が二人いて、弟息子に、

「ぶどう園に行って働いてくれ」と言いましたが、彼は、「行きたくありません。」と答えました。ところが、後になって思い直し、出かけて行きました。今度は兄息子に同じように言いましたが、彼は「行きます、お父さん」と答えましたが、行かなかったのです。弟が父の願ったことを行ったわけですが、これが、取税人たちや遊女の姿だと言われます。彼らのしていることは悪であり、罪です。しかし、後で思い直して、つまり悔い改めて、正しい行いをしたのです。けれども、パリサイ人や律法学者は、正しいことを言うのですが、神に命じられた律法を守ると言っているのですが、実は行っていないという問題があったのです。自らを正しくしているために、神の慈しみに触れることができず、それで心が変えられていない、頑なになっているために、正しい行いができないのです。(マタイ 21:28-32 参照)

しばしば、「自分に病があると認めたと時に、治療の90%は達成した」みたいなことが、よく言われますね。自分が罪を犯していると分かっている時に、罪から立ち直る期待ができる、ということです。逆に言えば、分からない時は治りようがないのです。

2B 頑なな心

人の心が頑なになるのは、イエス様の言葉を聞き、またイエス様の証しを見るたびに、それを拒んでしまうことであります。ヨハネが福音書で、ユダヤ人指導者らが、「イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で示されたのに、彼らはイエスを信じなかった。」と証言しました。さらに、こうも言っています。「彼らはイエスを信じるができなかったのである。」(12:38,40) 数多くのしるしを見た時に、信じなかったのも、ついに、証しを見ても信じるができなくなりました。それはあたかも、ギターを弾いている人々の指先のようにあります。弦を抑えると指が痛いのです。しかし、それを何度も何度も繰り返すと指先が固くなり、感じなくなってきました。ギターを弾いている人にとっては、それは良いことですが、神の言葉に対して拒み続けると、心が頑なになるという悪いことが起こります。

イスラエル人が、荒野の旅をしていた時のことを神は思い起こさせて、次のようにも警告しておられました。「今日、もし御声を聞かぬなら、あなたがたの心を頑なにしておはならない。(ヘブル 3:7)」御声は、自分の心に、その良心に聞こえます。それに対して応答するという癖を身に付けてください。そうすると、主の憐れみが惜しみなく注がれるのです。「イザ 55:6-7 【主】を求めよ、お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。7 悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」自分の思いをはるかに超える、主の慈しみが豊かに注がれるのです。

2A 御怒りの日

1B 正しい裁き

そして、「**神の正しいさばき**」が現れるとパウロは話しています。パウロがここで話している神の

正しさ、とは何でしょうか？一つは、「隠れたことをも裁かれる」ということです。2章 16 節に、「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」とあります。

人の判断は、表面的で、見た目に基づくものです。パウロは、他の人をさばくことの問題を 2 章において取り上げていますが、それは、自分自身が同じことを行っているのに、自分には行っていないと自分自身を偽ることができるということです。状況を少し変えれば、まさに自分自身がそれを行っているとすることはよくあることです。ダビデが、ナタンから、他の人の羊を取り上げた喩えを語ったら、彼は「死刑だ！」と言いましたが、それがまさに、自分がウリヤから妻バテシェバを奪ったことに当てはまっていました。

私が信仰を持つきっかけになった本は、「光あるうちに」という三浦綾子さんの書いたものですが、元々は雑誌「主婦の友」の連載だったようです。なので、婦人たちの井戸端会議が話題にありました。近所の奥さんが、夫以外の男性と恋愛しているという噂をしていて、「なんと汚らわしい」と言っていました。間もなくして自分自身が男の人と恋愛関係に陥りました。その時は、なんと恋はすばらしいのかと、のたまったそうです。でも、その二つのものさしを持っていて平気な姿こそ、罪なのだを書いていました。

私たち人間は、絶えず、他者と比べてそれで正しさを決めています。他の人より自分が正しいかどうか？社会的にこれは正しいことであるかどうか？しかし、その正しさの基準は絶えず、自分に都合のよいように変えられていきます。けれども、神は、すべての状況、その隠れたこともすべて見ておられます。黙示録で、ヨハネに現れたイエス様の姿は、「その目は燃える炎のようであった(1:16)」とあります。主は、そのすべてのこと、自分自身でさえ気づいていない、いや抑え込んでいる真実をも見て、それで公平に裁かれるのです。

人は、どうしても見た目で判断します。イエス様は、「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」と言われました。そこには、えこひいきが入ってしまいます。印象によって、相手を判断してしまうのです。しかし、神は印象を与えることができない方です。6 節に、「神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。」とあります。それは、ユダヤ人であろうが、ギリシア人であろうが全く変わりなく、「神にはえこひいきがないからです。」と述べています(2:11)。ですから、神のさばきが正しいのは、そうした公正と公平があるということです。

私たち人間の悲劇は、自分たちの判断がどれほどちっぽけなもので、うわべでの判断であるかを忘れてしまうことです。分からないことについて、分からないままにして、公平に裁かれる方に任せればよいものを、そうしないで喧々諤々と論じ合っていることです。主は、敢えて私たちに隠しておられることも、たくさんあるのです。「申命 29:29 隠されていることは、私たちの神、【主】のもの

である。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」現わされていることに、私たちの神経が集中することを願います。

私たちには、分からないこと、理解できないこと、不条理に思えることが多くあります。けれども、神の正しいさばきが現れる御怒りの日には、必ず、それらが正しい、真実であるということのできるものなのです。今は、隠されているけれども、後には明らかにされるのです。黙示録では、地上で神の御怒りが下った後で、天において大歓声が上がりました。「19:1b-2a ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。神のさばきは真実で正しいからである。」真実で正しいのだ、と、私たちは完全に納得することでしょう。

2B 蓄積

そしてパウロは、「怒りを、自分のために蓄えています」主は、悔い改める者には、これまでの一切の罪を赦し、洗い清める用意を、キリストにあって備えておられますが、自分は正しいとして悔い改めを拒んでいくと、その罪はそのまま残り、それが、正しい裁きの現れる御怒りの日に蓄えていくこととなります。

アブラハムが、自分の子孫がエジプトに下り、そこに四百年の間、奴隷となって苦しめられることを前もって神から教えられました。そして、四代目の者たちが戻ってくると約束してくださいましたが、なぜそんなに長い期間なのか？と言いますと、「創世 15:16 アモリ人の咎が、その時までには満ちることがないからである。」とあります。アモリ人たちの咎とは、ここでは幼児犠牲をしているであるとか、あってはならないことを長いこと行っているということです。400年という歳月に渡って忍耐しておられましたが、神は、ご自分の定めておられる限界点をお持ちです。人々が悔い改めることを願って忍耐しておられますが、その忍耐と寛容を、「神は何もしておられない」「神は是認している」とまで思う人たちがいます。けれども、そうではありません。神は、忍耐深い方ですが、罪を罰することがない方ではないのです。それが、御怒りの日と呼ばれるものです。そして、その時まで、隠れて行ってきたことを含めて、裁かれるのです。

ここで大事なものは、だれが主語か？ということです。神が、蓄えているのではなく、自分が自分自身で蓄えているということです。神は今にでも赦しを与えたいと願われています。ところが、その慈愛と寛容を、自分は正しいとしているから退けていることによって、罪が残り、神の御怒りのためにためてしまっているのです。悔い改めに導かれますように。イエス様は、十字架の上でも、「彼らをお赦しください。」と言われて、ご自分を罵っている者たちが赦されるように父に祈られました。これが神の御心です。